

## 雜 纂

### 日記通信

田 中 文 男

私は歐洲大戰中の大正四年三月に、米國留學を命ぜられ、他の大學からの留學生諸氏十數名と共に北米に向つた。恐らく文部省から醫學の研究生を北米に送つたのは我々が始めてであらう。其後年々米國留學生は増加し漸次米國醫學の狀況並に研究室内の模様は明かになり、且又既に留學中の先輩との連絡もつき、此頃は何時渡米しても研究上左程の困難を感じない様であるが、其初我々の留學した當時は此等の狀況は全く不明で、其上米國の諸大學に於ても、如斯性質の留學生を收容する準備も尠く、従つて研究の困難は豫想外であつた。私は其當時、日々の出來事を、今は亡き私の老母に通信するを楽しい生活の一つとした。左に掲ぐるのは、「ハーバード」醫科大學に於て「神經病理學」の夏期講習を受けし當時の日記通信であつて、此講習が、私をして大學の研究室に入らしむる動機となり、其後六箇月間樂しく作業に従事せしめた因となつた。現今に於ても或は又參考になる事もあらうと考へらるゝから、多少の私事に關するものあるに拘はらず、本誌に公にした所以である。

母上様。

けふは日曜で、私は今、さつと紐育と、ホムストンの新聞の二つに目を通して、筆をとりはじめたのです。御慰さかにもと、七月五日からの日記を、記憶をよびおとしてかきつけます。丁度けふが横濱丸の締切りで、そしてきのふまではいそがしくて筆をもつ暇が無かつたのですから。

(七月十六日、午後一時)

千九百十五年七月五日、水曜。

かねて醫學校の秘書役にあてゝ、七月六日から二十四日までの「神經病理學」の夏期講習をうけたい、其手續を教

へてくれと手紙をだしましたら、五日の朝、學校にすれば萬事指圖するとの返事をうけました。私はこれ迄病院や學校にも行きましたが、いつも御客さんとしてと學生としてとはありません。それで親切に待遇される事もありますが、又邪魔物扱ひを受けることもありませぬ。で此度は當然こちらから權利(?)を主張し得る學生となつてみようかと考へたのです。併しその結果は果してどうであらうかと云ふ心配は、随分前から頭の上にかぶさつて居たのですが、愈決心して、學校の日本で云へば大學院事務室と云ふ可き室に、秘書役のドクトルベッグと云ふを訪ねますと、他には他の科の講習をうける醫者連でしよう三四人詰めかけて居ました。やがてこれ等がすむと私の番になつてきた、申込用紙に指定された種々の項目を記入した上、二三の問答の末、「よろしい、あすから教室において下さい、そして今その「レデー」に三十五ドル拂つて下さい」との事で、私は早速丁度二三日前に銀行から取つて來た許りの新しい札三枚半渡しました。日本で云ふと七十圓です。馬鹿／＼しい様な惜しい様な氣がしましたが、が其女の受附が私の金と引換へに、聽講券を渡し乍ら「有難う」と禮を云つたのには少しく面くらいました。私は朝糞簡易食堂に行つて居ますが、金をわたした折にまだ有難うと云はれたことは一回もありませぬ。店屋でも、ともすれば「サンキユウ」と言はないことがあります。然るにこの大學の女書記は自分の金にもならないのに「サンキユウ」と言ひましたのは私の今の境遇、殊に役人的の氣分のどうしてもとれない日本人には異様に感じられました。兎に角これで私の手續はすんだ。然るにあすから一體どうしたらよいのか、一體誰を訪ねてこの室に行つてよいのかさつばり分りませぬ。言葉が自由であれば何でもないことですが、一度こちらがしやべつても一寸先方に通じないと、もう厭になつて其以上質問したくない。いづれにしてもあすになればどうにかなるだらうと考へまして、そして心のうちに、何だか七十圓捨てました様な氣持ちもしながら十二時すぎに宿にかへりました。かへつてみましたら日本から手紙がきて居ました、S K子さんと、京都のS君外一人と、それからMからと。そして又た私の外出中に先達來強い神經衰弱で度々私が診察したN君(高等學校の英語の先生)が禮にきたさうで、美しい花束と、「ウ井ス

キー」一瓶が残してありました。花束なんかを買つたのはこちらではじめてです。午後は天氣がわるい、目下大變有名な活動寫眞「私の子供等は何處にいるか」と云ふ題で、米國の上流社會の家庭に盛んに墮胎の行はれること、其爲に老後の寂寥と家庭の悲慘を來す事を示したものを見物にでかけましたが大したものでもありませんでした。

七月六日、木曜。

午後二時に兎に角、神經病理學教室と云ふのをたづねあて、教授サードと云ふのに面會しました。教授は一寸京都大學の荒木總長に似て居り、溫顔を以て他の聽講生と話し中でした。私は教授から私の講習生となる目的をさかるとまゝに「主として技術が習いたい」と云ふことを申しましたら、それならば朝からやつてこいとの事でありました。但し、此言葉の中に何とか「ホスピタル」及びミス何とかと云ふ發音も混つて居ましたが明かに了解し得ませんでした。それから一時間許り講義がありました。聽講生は私一人だと思つて居ましたら、外に女一人と男三人ありました。講義は精細な事は分りませんが大體の意味はつかまへることが出来ます。研究室は思つたより汚なくて整頓して居ません。某嬢が標本其他の整理をして居り、タフトと云ふ女醫が何か研究をして居ました。其外はがらんとして御寺の古い本堂にでも入つて居る様な氣がしました。

七月七日、金曜。

今朝待つて居た「エムプレス、エシヤ」號のメール(郵便)が來ました、京都のW先生、岡山のO及びS兩君、Mからでした。Mの手紙には、私の送つた小包のこともありました。おつかさんの御病氣は、其後少しは快くなられたが、此頃でも、先日私の差上げた手提げの金具の口を獨りでおあけになる事がむづかしいと書いてありました事は私の心に深く、悲みを彫りつけました。そしてきのふ教授がけふ朝から來いと云ひましたが、暗い重い雲が頭にかぶさつて居る様な氣がしてどうしても行く氣になれません。そして午後二時に教室に行きますと、「何故今朝來なかつた」と詰問されましたから「約束がありましたから」と心にもない虚言を申しましたが決して快よい感じ

は致しませんでした。一時間許りの私の豫期に反した抽象的の講義をして教授は去りあとで各自標本を検査するので、私はけふの分の三枚許りをみました。もう分つて居りますから歸りたいが、一人早く逃げる様にするのもわるし、立ち上つて機械等をながめて居ますと、助手のドクトルマイルと云ふのが來ました。「何か分かりますか」と聞きますから、私は「標本はよく分りました、もう見てすみませう」と申しますと、生意氣な言はん許りに、「君は病理學をやつたことがあるのか」とかいろ／＼の質問をしますから「實は私は技術が習いたいので主に午前中に此處に來ることにして居ます」と云ふと、ドクトルマイルは傍に居た女醫タフトに「さう云ふことか」ときよました。

處が女醫タフトはマイル先生と二言三言しゃべつたのち、私に向つて勵聲一番「あなたはきのふドクトルサバードの言つたことが分らなかつたのですか、午前中は何とか「ホスピタル」に行き、何とか嬢にあふのでしょう」とやられました。此女醫タフトと云ふのは年齢三五六とみえる、輪廓のはつきりした整然たる體格の持主であつて笑聲だけは銀鈴の様な響をつたへますが其外の態度は非常に冷かで、丁度彫刻の美人の様な型の人です。そして其口からかうきめつける様に言はれたのは、非常に私を狼狽させました。そんな病院の名前は從來聞いたことがない。又サバード教授がミス某と言つたが此教室にも助手のミス某が居る。西洋人が發音した人の名前が一度や二度で私等にわかる筈がない、と心中には反抗的の理屈も湧きましたが、要するに私の語學の不足から來た事とおもひますから冷汗を流しつゝ手帳をだして、其病院と、ミス某の綴りを教へて貰ふ。女醫タフトが冷やかな口唇から嘲ける様に投出すローマ字を拾つて見ますと Psychopathic Hospital, Fenwood road, Miss Scott. と分りました。「サイカバシックホスピタル」こんな病院の名前、又こんな性質の病院の存在も知らなかつた私が、突然として米人と共に此「ハーバード」醫科大學の講習會に紛れ込んで居る事はドクトルタフトから見れば、滑稽にして冷笑的に考へられましようが、私自身は眞劍にして悲痛なのであります。私はあつく禮をのべて、今は私の唯一の親友である様に感ずる私の麥わら帽子を抱へて學校を出ました。いつもなればすぐに電車にのつて、夕飯に多少の慰めを求めるので

すが、今は力なく朝からの経過を考へ乍ら、「フエンウエー」公園の中を遠廻りして、ぶらり／＼とろついた末、山宿にかへつて、あすの締切である「エムプレス、エシア」號の郵便に筆を執り、日本への文にせめてもの心をやりました。夕食から歸つたのち先日貰つたがまだ栓を抜かすにあつたN君からの「ウ井スキー」を少しく飲みました。そしてかう云ふ折には酒はいふものだ云ふ感じを獨りでつく／＼味はひました。

七月八日、土曜。

地圖で調べたフエンウード街の精神心理病院にいたのは、朝の九時二十分頃、行つてみますと、新しい、大變立派な病院です。受附の女に「ドクトルサードに會ひたい」と云ふとわかりませんが、二三度繰り返しても通じませんから、一々綴で Southard と言ひますと、「オー、サード」と、漸くわかりました。私は此教授の名を文字をたゞつてこれ迄サードと發音して居つたのであります。此處でも私の語學の貧弱を自分で憐れみずには居れませんでした。が、サ教授は未だ來てないとのこと、それならばと、ミス、スコットと申しますと、早速自分が立つて二階の迷路の様なところの、奥の研究室に案内してくれました。これ迄大分病院に行つてみますが、受附の態度でもう大抵其病院の空氣はわかります。私は此受附が私をわざ／＼案内してくれたので此病院は大分違つて居ると思ひ乍らあとに行きますと、研究室の戸をあけて「ミス、スコット！此「セントルマン」がアナタに會ひたい」と傳へてくれますと、三十二の女が私をみるや否や、「アー、ドクトル、タナカー」と手を出してくれました。私の名前を教授から聞いてよく記憶して居てくれたのであります、そして私が手持無沙汰にして居ると、いろんな標本をもつてきましたり、又は研究室内をあちこちつれて見せてくれましたり、出来る丈の親切をしてくれましたのは、蘇生した様に嬉しく感じました。出して呉れさせた腦、脊髓の顯微鏡標本をみて居ますと、十時すぎに、も一人三十五六の女がきました。ミス、スコットが此女を「ドクトルキアナバン」と言つて紹介してくれました。つまり私の居る室がドクトルキアナバンの研究室でキアナバンが此病院の病理研究室の主座でありミス、スコットはキアナ

パン女醫の助手であり、「ハーバード」大學神經病理學教授である、ドクトルサバードが此病院の院長であること云ふ事はじめて私に分りました。此ドクトル二人に又た女の秘書役(タイピスト)が二人附屬して居ます。萬事が大仕掛でとても金がなくては出来ぬ事とつくづく感心やら悲觀をしましたが、體裁や仕掛け許りは立派でも、成績は大分あやしいものもある。金の無い日本人は努力して成績でもつてこれを補はなければならぬと、また元氣になりました。病院で晝飯をとつてはどうかと言はれたのを斷つて、宿にかへつたのは二時頃、それからけふの六時に締切である、メールにぞ、W先生、K、A、S、Hの諸氏及びM等に手紙やら「ハカキ」をかきまして、電車で本局まで投入に行きましたのは五時半頃。土曜日の午後丈けは學校の講義もありません、けふは何だか、のんびりした心になりまして、週の終りの土曜日の夜を、留學生「クラブ」の一室で他の留學生連中と高談、放笑してくらしました。けさ文部省から金が二百四十圓きました。四月から九月分迄の學資増額の分です。これ迄は一箇月百七十圓であつたが、二百十圓つまり百五十圓になつたわけです。

七月十日、月曜。

朝は例の通り精神病院に行きました。ミス、スコットからいろいろ得るところがあります。「マイクローム」の刀のとき方、刀の扱ひ方等でも、成程とおもふ點もありました。私は今、「私は此國に何物かを獲に來たのである、日本の醫學を示しに來たのではない、それであるから、何でも構はぬ、私の知らぬことで、爲めになることは習つて行くべきである、教授としてではなくして、學生として研究すべきである」と云ふ考への下に、凡て見學又は聽講をして居ます。それで先方から聞かれる時の外は、私の智識、又は私の意見を述べたことはありません。ミス、スコットに對してもその通りで、けふは私の經驗したことのない「パラフィン」切片を作ることを習ひました。併し私は此「パラフィン」切片の製法を日本で知つて居る人が無いかの様に、わざわざ遠い米國まできて、言葉に究屈して、そして人の親切に感謝しつつ、此教室で習はなければならぬであらうかと考へ、そして又「ナイフ」の磨き方に感心する位

で満足する私を顧みました。そして私はわざと良い方は遠慮して使用せず、悪い方の皮紙を貸して貰つて注意深く刀をこぎ乍ら、自分自身を憐に氣の毒に感じました。けふはキアナバン女醫は何處かに屍體解剖に出かけたさうであります。此病院は州立ださうです。午飯は勧めらるゝまゝに、ミス、スコットと階下の食堂に行きました。私の座つた「チーブル」には、男は私と私の隣りの某ドクトルの外は五人許り女で、一々紹介されましたが何れもミス何とか、ミス何とかで少しも名前はわかりませんが、究屈なこと夥しく、隣りの男と少し話しを換したのち、私の世話掛と頼むミス、スコットに連れられて廊下に出まして、ほつと息をつきました。「何處に代價を拂へばよいのですか」とさぐと「御客さんですよ」との事でした。此病院に勤めて居るものは午飯はすべて無料ださうです。併し、二時からは又た學校の講義ですか、どうも感心しません。外の三人も不満足らしい、内一人はけふは缺席。講義のあとで又めい／＼標本を検すること二時間許り、今日の標本で私は多少の得るところはありました。まあ、かうてくらせば七十圓捨てた様になかつたと、やゝ安心と共に自ら慰さむるところがありました。二三日来少し暑くなつてきました。けふの新聞をみますと獨乙の「サブマリン」がどう／＼米國までやつてきました、えらいですね。

七月十一日、火曜。

朝は精神病院行、與へられた「バラファン」切りを終る。「實にうまい」とミス、スコット大に賞賛する。私の日本の經歷を聞きますから別に隠すべきこともなし、ありのまゝをのべる。キアナバン女醫じきりに日本のことを聞く。どうしても日本の話と云へば、富士山と東京位より知つて居ません。私が岡山のプロフェッサーと申しましても、先方で勝手に東京のプロフェッサーにしてしまつて却つて恐縮することが度々です。日本では何が主な産物か、金は何からもうけるのかと聞きますから、私は「絹や茶をよく外國に出す」(實は一寸此質問にはよわかりました、一體日本は何から金をもうけて居るのでしよう)と言つた末に、私は冗談半分又た米國の目下の現況(米國は目下歐州大戰に對しては局外中立を標榜して居りますが晝夜兼行で武器を製造し、主として露國に供給して居ます)に對す

るひやかし半分に「けれども目下は尙ほ露國に武器を賣りつゝある」と言ひますと、二人の女の顔色がさつと變りました。この事は二人とも新聞で知つて居るのでしよう、併し二人は私が今先き私は政府から派遣された教授であると自分を説明したあとで、露國に武器を賣りつゝある日本を誇つたとおもつたのでしよう。さなきだに疑をもつて居る胸の底に、二人とも同時に同様なある閃きが起つたらしい。そして私は二人の胸の中にある「探偵<sup>スパイ</sup>」と云ふ文字を透し見て、しまつたと感じて不勘當感しましたがドクトルキアナバンも私の此狼狽を感じして、すぐに笑顔に變へました。そしてミス、スコットに「He is joking (冗談だよ)」と言つたので私も心を回復して、さも冗談らしく笑つてみせました、が私は此後標本を截つて居る間でも、何だか此二人の女の眼に何物かを恐れる様な光のあるのを見て、私に親切なる某米人が「冗談でも疑になる様なことを言つてはいかぬ」と云つた注意を悔恨の情と共に想ひ出さずにはをられませんでした。それでその名譽回復のつもりでつとめて日本の事なんか話してきかせました。「オハヨー」「サヨナラ」の日本語を教へますと、「オハヨー」はやすが「サヨナラ」はむつかしいとミス、スコットは早速手帳につける。日本の赤ん坊は少しも泣かぬと云ふは本當かなど、奇抜な質問が出る。私は「大ていは床の上にねかして置くと泣いて仕方がない、だいてほしいから」と答へたいところ「だいてほしい」と云ふ英語が一寸わかりません。それで私は「……………to be armed」と窮した言葉を使ひますと、二人とも腹を抱へて笑ふ。私自身もおかしくなりましたが「それでよろしんです〜」とドクトルキアナバンが大に私の着想の奇抜?を賞めてくれました。一時半頃に病院を辭し、ひるめしは牛乳ですまし、學校に行きますと、十一二の女の子が二人廊下に居て「猫を殺すのは此處ですか」、「うちの猫が病氣で死にかゝつて居るのです」等の話及び其風體から、日本でもある、大學に動物を賣つて金を得んとする連中ぢや、一寸興味をおぼえました、「私はどこか知らん」と答へますと、姉の方が「金を少し下さい」と露骨にできました。二時からドクトルアイル氏の講義、標本をみて宿に歸りついたのは六時でした。

母上様。

けふは日曜です。雨で少しは涼しい方です、海軍軍人で、私に會つて米國の感想を聞きたいと云ふ人と十時から「クラブ」で會見して今まき下宿に歸り、一寸新聞をみて、これから先日の日記の續きに筆をとりはじめます。あす、阿波丸便の締切りまでにと。

(七月二十三日午後四時)

七月十五日、水曜。

九時すぎに例の如く病院に行きました。「バラファン」で固めた組織の切片を硝子の上にのせることをスコット嬢から習つて、そして前に瓦斯を燃やして居ますと、「カラー」から胸に熱い汗がだら／＼垂れます。此頃は毎日新らしい「カラー」と取りかへるのですが、此日はもう晝までにクタク／＼になつてしまひました。ドクトルキアナパンの「セクラタリー」(タイピスト)である三十六七の某嬢が、仕事をして居る私の傍にやつてきて、いろ／＼日本の事をきいて、そしてスコット嬢と一所に「ワンダフル、カンツリー」(驚嘆すべき國)だを連發して居ました。「ワンダフル、カンツリー」と云ふ現し方の裏面には種々の意味が含まれて居ます。十一時頃に私は私の今の先生であるスコット嬢に御許しをうけて銀行に行きました。此頃は朝から晩までですから銀行に行く時間が無く、金もないのに困つて居たところ丁度けふは十一頃に仕事の一段落がつかましたから幸に金をとりだしにいつたのです。街は随分あついで、途上で人夫が狂人になつて居るのをみました。此日最高九十三度です。日本なら夏の中はこれ位はあたり前ですが、家屋の構造、衣服の相違等で、分たへます。一體こちらの女の服装は、男を馬鹿にしたものはありません。夏は女は腰から上は、乳と脊の真中邊を少しかくす丈で、あとは外から中の肉體をすかしてみえる様な薄い上衣をきて居ながら、紳士は「シャツ」に「ホワイト」、「ネクタイ」、「チョッキ」、上衣をかさねて、そして女の前では扇も使つてはならないのです。宿に歸つて「カラー」をかへて二時から學校の講義に行きました。此教授の講義は、病理學と云ふよりも、むしろ心理學の講義で、私はあまり興味もなく、強ひて腦をつかふのも愚だと知つて居ますか

ら外の事なんか考へたりしてボカンときいて居ますと、「ミカドと云ふ言葉を使つてもよいか」とか、「日本語に、知る、認識する、と云ふ言葉の使ひ別けがあるか」などとの質問をたゞされ、時々面喰ひました。講義のあとで例の通り顕微鏡をのぞいて歸りましたのは六時頃。夜は疲れて何も出来ません。

新聞に、海水浴場に鱈が出て人が二人噛まれて死んだと大評判です。

七月十三日、木曜。

例の通り九時過ぎから五時半頃まで汗を流しました。日本と言へば神秘的な夢の様な國でも思ふのか、「セクレラタリー」なんかやつてきて、じきりに日本の事をきくす、そして突飛な質問に當惑させられます。「只今、我々の間に日本の事が非常に興味をひいてきたのです」とスコット嬢が言ひます。病院でこの科に行つて見ましても「タイプライター」が無ければ仕事が出来ない程盛に使つて居ますのは羨やましく感じます。それのみか夜間醫者が或事件を記録したい場合に、それを蓄音機の蠟管に吹込んで置いて、翌朝「タイピスト」がそれを廻はしてきく乍ら、「タイプライター」に打つなどは少し馬鹿氣でも居ますが。

夕方留學生の「クラブ」にゆき、「マグロ」のさし身で夕食を取つて居ますと、Mと云ふボストン市の山中商會に勤めて居る人が、五ツになる娘の子をつれてやつてきました。此人の妻君は長く日本に残つてあつたのですが、昨年の九月に此娘をつれて此市にやつてきて今一所に住んで居るのです。其妻君がけさ病院で女の子を生んださうでM君は又女の子だと落膽し乍ら安心してやつてきました。「西洋人の赤子が十人許り並べてありました」と言ひますから「あなたの赤子と何か違つて居ますか」と私が尋ねますと「イーエ、別にどこも」と云ふ口の下に、傍に居た此サチ子と云ふ娘の子が「フニー、ア、クロンボミタイナ顔シテル」と叫びました。此正直なるサチ子さんの返答にM君は大に狼狽しつゝ「さうですな、矢張黒い顔をして居ますな、こちらの奴は赤いですね」には氣の毒にもあり、滑稽にも感じました。

七月十四日、金曜。

此朝病院で仕事の傍らミス、スコットが「何が一番アナタを此國で驚かせた？」と私にきよました。私は一寸困りました。「私は大抵の事は日本できいて居つたから何も左程驚ろいたことはないが、女子教育の進んで居るのには最も驚ろいた。現にマサチュセツト州で此六月に「カレッジ」を卒業した女の数が男の数よりも多いなどは私は驚きました」と頓智をかかせました。スコット嬢頗る大得意でした。日本の女の事なども聞きますから、大に私の意見を述べました（大に述べる積りはつもりでも、話は仲々さううまくゆきません。話せないで却つてよいこともあります）日本の「キモノ」をしきりに賞賛しますから、私は「女には良いが、男にはむかぬ、男は活動しなければならぬから」と答へますと「女も活動しなければいけないではありませんか」には一本參つてしまいました。

ドクトルキアナパンが「こん度、此顯微鏡の「レンズ」が來たのですが、私には古い方とどちらがよいか分らぬから一寸見わけてくれ」と私に顯微鏡をさしました。女と雖も、長く病理學者として立ち、獨乙にも留學したこともあり、且今迄にも少なからぬ研究報告もだして居るキアナパンがそれが分らぬ筈が無い。私を一寸試験して見る積りだと合點し乍ら、私は新しい方の遙かに良いことを斷言したのち、私も一つ質問を出しました。「聽神經を切斷したら其變性的變化は上昇的に進行するか、又は下降的に行くであらうか」と。するとキアナパン氏は一寸首を傾けて居ましたが、率直に「私にははつきり分りません。サワード教授に聞いて見ましたか、教授はきつさう云ふ質問を喜ぶでしょう、聞いて御覽なさい」と。私は其正直なのに感心し、却つて私自身少しく慚しく感じました。人を試すと云ふ心が、私の腹の中にあつた事を。

學校では昨日から例のタフト女醫が、自分の行つた脳の研究に就て講演をしました。聽講者四人の中、私以外の三人は始終なまけて二人宛いつも缺席して居ます。併し私は顯微鏡標本で大分得る所がありました。

七月十五日、土曜。

けふは朝から少し脳が重たい日です。病院でスコット嬢が少し私に警戒しだした様に見えるのも面白く思はれない。何も知らないと思つて居た私が、案外病理的方面の事を知つて居るのに氣が附いて不審に思つて居る所に、此數日來新聞に日本の探偵の事が中傷的に記載されるので、私も或はと云ふ感じが彼女の腦中に湧いて來たらしい。けふ彼女が説教的口吻で「日本とアメリカは親密でなければゆけません」と申しましたのも愉快に響きませんでした。

母上様。

きのふで學校の方は終りました、けふは久振にゆつくりとした気分になりました。あまつて又「メール」がありますから、今度は一つゆつくり筆をさる様に、今夕から日記の續きを書きはじめます。

(七月二十五日午後八時二十分)

七月十六日、日曜。

九時に起きましたがけふは脳が少しわるいのです。新聞をみますと、この新聞にも今度日本から試合に來た「テニス」の選手熊谷が米國でも有数の選手であるグリッフィンと云ふ男に勝つた事を非常にやかましくかき立てて居ます。熊谷の技倆に賞賛の辭を惜まないと同時に、日本人と云ふ奴はどんな事でもやり出すと云ふ驚異の意がありありと見えて居ます。熊谷は此グリッフィンとの試合で、つまり、アメリカ合衆國の選手權を得たわけで、八月に愈紐育でアメリカの大關連と立合ふのです。殊によると此國の大將も敗るかも知れません。さうなると、日本人に對する感情がよくないと云ふので、紐育に居る日本人のあるものは、熊谷に忠告狀を發したかどの事でありませぬ。兎に角目下此連中はアメリカで大人氣で「テニス」界をうならせて居ます。一藝に秀づるればえらいものです。

一時から四時半迄、四日から十一日迄の日記をかきまして、電車で本局に投入にゆきました。歸て「クラブ」に往

つてみますと誰れも居ません、折から來合せたK君I君と支那料理屋に行きましたところ、けふは何日かは知らぬが、支那人で一杯です。「けふは支那の祭日？」とさうですと「さうです」と番頭が答へました。歸つて考へてみますと成程、七月十六日、盆の十六日です。祖先を祭る東洋的大祭日であつたと、はじめて氣がつかまりました。

七月十七日、月曜、晴、あつし。

此頃下宿に地方から女の室借人が二人きて居ます。「クリスチアンサイエンス」の教會にきた、云はば本山参りですね。處が私の隣りの應接間でおそくまで姦しいのには閉口です。ほんとに女が三人あつまればやかましいですね殊にアメリカ人は。朝は不相變病院行、染色の末は今度は革砥でなく砥石で刀を磨ぐ稽古です。一藝を習得すると云ふことは、すぎ許りでは出来ない、容易なことではありません。ですが一々親切に手をとつて教へてくれるのは感謝して居ます。

七月十八日、火曜。

朝病院行き。仕事をして居ますとドクトルキアナバンが私の傍にきて「御招きをしますから長く此研究所内に止まつてくれませんか」と突然私にさう言いました。私は「長くですか」と反問しますと、「クリスマスか御正月迄までも、どうか」との返事です。私は一寸迷ひました。實は此研究所から随分報告も出て居りますし、且皆が親切でありますから或は少し止まつた方が自分のためによくはなからうかと考へて居た際でしたが、兎に角禮を述べ且少し考へると申しておきました。多分これはサバード教授がキアナバンに意を含めて傳へさせたのでしようが、あまり丁寧にはいれると、何だか却つて氣味がわるい、殊に「どうぞ」などはどう云ふ意味かわからないと腦が亂れました。キアナバン氏は私のはつきりしない返事から推して私は居る意志をあまり持つて居ないとみたらしく、私のけふこしらへた標本を見乍ら「善い人はすぐに去つてしまふ」と獨言を言つて居ました。

午後聴講生の中の女の醫者が皆の前で私に向つて「日米戦争は無いかな云々」と質ねます。私はむつとし乍ら、そ

んなことがあるものかと答へますと「それでも米國がハワイを合併した折に抗議したではありませんか」と。此女はこれ迄聴講生の中でも私に親切にしてくれた人です。それに矢張こんな失禮な質問を發します。いやアメリカ人の心中を割つてみれば對日本人の感情は十中八九人迄此女と同様ではありますまいかなどと厭におもひました。

「クラブ」に往つてみたら生源寺君が旅から歸つて居ましたが、たつた二週間の旅行に目立つて瘦せて居るのに驚きました。紐育で南京蟲に喰はれたり、ワシントンで口の傍に「フルンケル」が出来て、苦痛の結果、ポルチモア迄出かけて、日本人の醫者をたづね廻つたが、宿所が分らぬので落膽して歸つたこと、遂にたまらずに「ネクタイ」の「ピン」を消毒して突き破つて膿をだしてやつと幸にも治つた話などをきき、いやこの暑いのに米國の南方に向つて旅などをするものでないとおち氣がつかました。

きのふの午後の日記をかくのをわすれました。二時から例の通り講義ですが、けふはアイルと云ふドクトルでした、顕微鏡標本を見ました後に「神經細胞の死後の變化と、變性的變化とどう判別するか」と質問しますと「君は知つて問うんではないか」には一寸弱りました。私が言葉は分らなくとも案外馬鹿ではない、油斷がならないと警戒して居るのです。「いや、私は日本でも此問題で困つたから聞くのである」と答へますと、先生沈思默考すること數分間、其答の頗る澁滞不明なのは氣の毒に感じました。

今日のポストンの新聞に、輕井澤で米人夫妻が斬殺された記事がありました。米國でも「ピストル」ではよく人を殺すのですが、刀で斬殺すると云ふと何たか慘酷にきこえます。先般もある日本人と演藝書報をみて話したことです。大抵の書は刀を以て斬合つて居るか、殺して居るところです。これは西洋人にはみせられんね」と。併しこちらの芝居は刀のかはりに「ピストル」と接吻ですから、もう活動寫真なんか馬鹿氣で見えて居られません。

七月十九日、水曜。

朝病院、刀とぎ、染色、ドクトルキアナバンに私の癩の論文、耳の標本などを持って行てみせました。内耳を顯

微鏡でみて、これは何かなど聞いて居ます。私はけふ此等の標本を持つて行つた趣意は、兼てからサバード教授も、キアナバン氏等も日本の醫者は偉いと賞賛して居るが、私に「長く止まつてくれ」と云ふ眞意は、或は先般來私がい分仕事に熱心であり、且つ彼女等が御世辭ではありまじようが、いつも私を賞めて Fine and considerable gentleman である(思慮のある紳士、私に Considerable gentleman と云ふ言葉を使つたのは朝河さんがくれたモース教授への紹介状にもありました。と云ふ意味から、長く居らしてそして今迄やつてきた様に刀を磨いだり、仕事の手傳をさせるのではあるまいか。兎に角其眞意が分らぬから私のこれ迄の標本を示して置いて、そして其上に止まれど勧めらるゝなれば又た考へようと思案したのです。癩の論文は日本語で分らぬながらも、其附圖、文獻等で大抵内容を察し、又た耳の標本に就ても頗る感心の體で、折柄來合せた二三のドクトルにこれがドクトルタナカの論文だとい々紹介されたのは聊か心苦しくおもひました。

午後は講習生は二十五哩許距つたある病院の參觀ですが、私は出かけませんでした。

夜先達來から澤山貰つたサバード門下の論文に目を通しました、どうも私にあまり興味のある仕事を見出しません。そしてけふドクトルキアナバンが私の標本を驚きを以て見た態度からして、どうも此教室に止まつてもあまり利益でもないかと考へました。併しも一度何か云ふまで決定を待たう。九月からあちこちあはたどしい旅に出でても、心が落つかずして却つて疲れる許り、誰れがこんなに歓迎してくれるところも無い、と云ふ氣分も、又た決心を鈍らせるのでした。(午後十一時)

七月二十日、水曜。(二十六日午後七時筆をはじめ)

朝は不相變病院に行つて標本切り。暑いからと云ふのでミス、スコットが冷茶に「レモン」の一片をいれた露西亞流の茶をもつてきてくれました。ドクトルキアナバンの前には煽風器をまわして居ます。それでも私に遠慮をして、しきりに私の上衣を脱げと云ひました。午後は學校、講義がおもしろくないのでいつも一人二人缺席してきません。

けふの新聞に、アメリカはロシアと日本から征服されること書いてありますから、何事かと読んでみますと、キリスト教の「テント」演説に一牧師が聖書の何處かに「われ軍隊を呼び來らん、一つは北より一つは昇る日より」とあるのは即ち露西亞と日本の事なり」と演舌して居るのです。牧師でさへこんな者がある。あきれて物が言へません。キリスト教の説教にまで人氣取りの妖言を吹聴することは苦々しいです。

七月二十一日、金曜。

朝は病院。午後の講義は學校ではなく、矢張此病院で腦微毒に就ての講演であるので、其まゝ病院に居残り、じきりにすゝめられた晝めしを断つて、獨り標本を作つて居ますと食事を濟ませて上つてきたドクトルキアナパンが「なんば日本人でも食はなければならんでしよう」と「パン」と「バター」に氷水一杯もつてきてくれました。午後の講義には三人中の一人よりきよく來ませんでした。

七月二十二日、土曜。

朝は病院。けふで講習は終りである。ミス・スコットが私に持つて歸つてもよいいろ／＼の標本をあつめてくれました。二時から學校でサワード教授の講義がありました。これが最後の講義ですが、外の三人は來ません出席者は私一人です。西洋人と云ふものは案外禮義の無いものです。考へてみますと、聽講生四人の中で、言葉の分らぬ者としてはじめは悔られて居た私が一番利益を得た様におもひます。まあ何でもやつてみるにこした事は無いと考へました。此日に教授から又「止まつてはどうか」とすゝめられました。まだ決心がつきません。まあ月曜日にも一度病院に行きますからそれ迄に決心するつもりです。

六時に「クラブ」で、生源寺、平岡兩君に會ひ、それから一所にチャールレス河の周遊「ボート」に乗船して四十分許り川風に吹かれました。

七月二十三日、日曜、雨。

朝十時から、豫ての約束に従つて「クラブ」で海軍中佐M氏と會見しました。此人は各方面の人に會つて、米國々民の人情風俗を項目を分つて質問し、それを一々筆記して居る人です。これがすんだのが午後二時頃、それから十二日迄の日記をかきました、あす阿波丸の締切りですから。

七月二十四日、月曜。

昨日中に、愈暫らくホストンに止まるかどうかを熟考しておこうとおもひましたが、どうもよいかわるいか考へがつかえません。が何處に往つてみたところが、格別よいところも無ささうでもあり、且あちこちに一二箇月滞在する旅は、心が落つく暇が無く、何だか氣がいらだつ様にもあり、あんなに親切に止まれ止まれとすすめてくれる教室且相當に努力して居る研究室なれば、五六箇月止まつてもよいではないかと云ふ念の方が勝つてきます。兎に角けふが約束の最後の日ですから、病院に行きました。そしてドクトルキアナバンに「もしあすから八月中休暇をとることが出来、そして九月一日から来てよいのなら五六箇月間御厄介になりたい」と言ひますと、大變喜んでくれました。そして其後院長室で教授とも話して居ましたが「ドクトルサードも大變喜んで居られる。早速何か研究せられたらよからう。どう云ふところを研究したいか、こちらにも用意して置かなければならぬから」との返事で豫期以上に大變調子がよいのです。それで私は「休暇中に私が考案して、いろいろの問題を作つて來ます、そしてその問題の中であなた方がよいとおもはれたものをやつて見ましよう」と申しますと、先方もそれに同意してくれました。私は九月から來年の二月迄つまらぬものでも何か一つ位は出来るだらうとおもひます。尤も此研究室では動物實驗をしませんから、どうかとおもはれますが、いづれにしても損にはならず、仕事が出来ないにしても將來研究の基礎を作るには好都合と考へられます。それでまあ來年の一月か又は二月迄はここに居ます。こんなに氣にいられるところによつたのも運命、もしあとで悔むことがあつてもそれも運命でしようよ。

此研究室では此約三週の間は實に仲々の厄介になりました。それで禮にとミス、スコットにあの日本から持つてきた、うす絹の「スカアーフ」、ドクトルキアナパンには先日花瓶と一所にきた人形を贈りました。二人とも大喜びで殊にミス、スコットはそれを早速首のまわりにたらし雀躍して居ました。わかれしなにドクトルキアナパンは私の手を握つて「是非歸つて來なければいけません」よと言ひ足しました。私は少しく腹をみられた様な氣がしました。實は勿論九月から更にくるつもりですが、萬一にも此暑中に健康状態がわるい様なれば、また其時は其時で失敬してやめにしようかと考へて居たからでした。

かう云ふ順序で現今では私は更に九月から約六箇月間當地でこん度は實際の研究なるものをやつてみるつもりです。どうなるかはすんでみなければわかりませんが。そして八月中は少しづつ準備的の勉強もし、一週間許北方にも旅行し(生源寺君と)九月から大にやつてみるつもりです。勿論健康状態には充分注意しますから安心して下さい。且私は醫者としては充分なる歡待と同情を得て居ますから。但研究室を出ると、もう矢張一個の移民扱ひですね。けさ、七月一日のMのハカキ、新聞、雜誌の外に、I、Y兩氏及柿内君から寫眞がつかました。日本にはMのところの手紙、新聞繪附録を送り、外に柿内君に御禮の手紙と共に長歌一首をかきつけました。

敷島の和の國ゆわだつみを	渡りきぬればこそぞの春
わかれし人も薄雲の	いやへだよりぬしかはあれど
廣しと云ふもアメリカの	國內にすめば我ふめる
土の隣りに君もまた	立てるおもひてけふとすぎ
けさ賜ひたるうつしゑを	あかず眺めていそのかみ
古きおもへば君とわれ	相みざる間に七月すぎぬ